

# 言語とイメージ

## —あるいは、我々はいかに読むべきなのか—

長谷川 暁人

### 1. 序

ベルクソンは『意識の直接与件』の冒頭において、非延長的なもの（非空間的なもの）を延長として理解しようとする従来の哲学を形容して次のように述べている。

我々は自分の考えを必ず言葉によって表現し、またたいていの場合、空間内で考える。言い換えるなら、言語(le langage)が、我々の持つ観念<sup>(1)</sup> (l'idée)相互の間に、物質の対象の間と同じ明確な区別、同じ不連続を設定するように要請する(DI3)。

ベルクソンが非延長的なものの代表として考えているものは、もちろん持続や意識、運動などである。これらはしばしばメロディーに喩えられるように分割不可能な、あるいは分割してしまえばその性質を変えてしまうような流れであり、固定化を許さないものである。そして言語化するという事は、まさしく固定化することに他ならない。

激しい愛情、深い愛いは我々の心を侵す。それはお互いに溶け合い浸透しあっている無数の様々な諸要素であり、はっきりした輪郭を持たず、お互いに外在的であろうとする傾向を少しも持っていない(DI88-89)。

感情もやはり流れであり、途切れなく流れながら無数の側面を作り出す、言うなれば「質的多様性 la multiplicité qualitative」(DI70)を有している。ところが、こうした感情を要素に分解して言語の形で展開していくと、感情に名前を付け定義をすることと引き換えに、もとの感情が持っていた生氣と色彩が失われる。言語化されてしまった感情は単なる客観的表現になってしまうのである。様々な異なる内的な感情も、例えばそれに悲しみという符丁をつけてしまえば単なる量の差異として、いわばある性質の

多少として理解されるだろう。そして、本来は比較のできない質的な差異を持っていたそれらの感情は、こちらの悲しみはあちらの悲しみよりも深い（大きい）といったように比較可能なものへと変化する。そのような形をとった感情は、もはやもとの質的な多様性を失っている。

では、客観的表現となった文章はもはや読む価値のない、思考の残滓のようなものなのだろうか。答えはイエスでもあり、ノーでもある。すなわち、書かれた言葉は確かに思考の残滓ではあるが、それを読む価値はある。なぜなら、書かれた言葉の奥には、言語化不可能な持続が存在し、我々はそれを読み取ることが可能だからである。

本論では、我々はいかにして客観的な表現としての哲学的文章を読み解くべきなのかを考える。結論としては、それには大まかに言って二つの方法がある。一つは、媒介的イマージュと呼ばれるものをたどっていく方法、そしてもう一つはリズムによって対象に同一化しようとする方法である。そしてこれらの方法はそれぞれ全く違う過程を成しているのではなく、同じ道筋をたどる二つの方法として提示されるであろう。

## 2. 問題を明確にすること—持続と言語の関係—

ベルクソンは『意識の直接与件』において我々の感覚や感情などを、「持続 *la durée*」であると規定する。ベルクソン自身の言葉を引用してみよう。

純粹な持続とは、我々の自我が生きることに身を委ね、現在の状態と以前の状態との間に境界を設けることを控えるときに、我々の意識の状態がとる形態である (DI67)。

こうした持続はベルクソンにおいてしばしばメロディーの比喻で語られるものである。メロディーは全体で一つの旋律を成しており、もしそのうちの一音が不当に乱されれば、楽節全体が印象の変化を被る。持続もまた連続する全体であり、質的に変化することなしには分割や固定を受け容れることがない。

ここでベルクソンが分割や固定の象徴として想定しているのが、科学が行う分析という手法である。例を引こう。一本の針があり、それを少しずつ手に突き刺していく。

すると、最初はくすぐったいような感じ、ついで接触感があり、それが次第に痛みに変わっていく。これらの過程は全て途切れなく移行する連続であり、「内包的（強度的）intensif」な質を持つ持続である。仮にその針を突き刺す力の強さを科学的に分析したとしても、そこから得られるのは「外延的 extensif」な量だけである(DI31)。客観的なその量は、決して主観的な感覚の質を表すことはない。分割や固定化による分析では、持続の質的なニュアンスを失うことなしにこれを認識することができない。

そして、こうした認識は、言語による記述の問題にもそのまま接続される。生き生きとした感情は、言語という装置によって抽象的な観念と化し、相互に固定化される。ベルクソンは同じ『意識の直接与件』の違う箇所でも次のように述べている。

感情そのものは、生きていて、発展するものであり、したがって絶えず変化するものである。そうでなければ、感情が次第にある決意を導くことを理解できないだろう。決心は即座に行われることになってしまうだろう(DI116)。

本来感情は切り分けのできないものである。何かを決意する場合、様々な感情が交じり合い、少しずつ変化しながら、それでいて一つの全体を成している。それは、戸惑いとか期待とかいった単純な言葉では表現しえない、いわば意識の持続なのである。このように、感情は言語化にはなじまない。もう一つベルクソンの著書から論拠を得ることにしよう。

もしも今、誰か大胆な小説家がいて、我々の因襲的な自我<sup>②</sup>によって巧みに織り上げられた幕を引き裂いて、この表面の論理の下に根本的な不条理を、また、単純な状態の並置の下に、名付けられる瞬間にはもうすでに存在をやめてしまっている無数の様々な印象の無限の相互浸透を我々に示してくれるならば、その小説家は我々よりも我々自身のことをよく知っている、と言って褒められる。しかし、決してそうはならないのであって、小説家は我々の感情を等質的時間の中に展開し、言葉によってその諸要素を表現するというまさにそのことのために、彼もまた我々に感情の影を示すに過ぎない(DI88)。

ここでは小説家を例にとり、言語によって等質的に展開された表現に対して、そのよ

うな方法では感情は捉えることができない、という批判が行われている。先程と同様に批判の要点は感情に名前を付け羅列すること、あるいはその記述であり、この限りでベルクソンの批判は一貫していると言えるだろう。

まとめてみよう。ベルクソンにとって重要なものは持続であり、それは途切れのない連続であった。感情もまた持続であり、それはベルクソンが質的多様性と表現する、単一でありながら多様な全体を成している。そこでは、様々な感情が互いに浸透しあいながら次第に変化していく無限のニュアンスがある。だが、言語あるいは記号的表現はこうした我々の思考や感情を固定化し、その流れを途切れさせるものである。つまり、持続は言語のような表現形式にはそぐわない、枠にはめることのできない流動であり、科学的な分析や言語による固定化などの断絶を受け容れない。

こうした事情からベルクソンは言語の否定的側面を明確に意識しており、言語によって表現されたものへの警戒を怠っていない。そう捉えて差し支えないだろう。

### 3. 直観によって言語を捉える—対象の内に入り込む—

前節では、ベルクソンの言語に対する態度を明らかにした。ベルクソンは言語を過度に重要視することに警鐘を鳴らしている、あるいはもっと踏み込んでいえば、持続を表現するのにふさわしくない、と考えている。では、そのように言語で表現された思想というのは、形骸化した価値のない代物なのだろうか。

ベルクソンは『思想と動くもの』に所収されている「哲学的直観」において、スピノザやバークリを例に出して哲学者の思想を読み解く過程について語っている。哲学者の書いた文章は抽象概念が複雑に絡み合っている。それを読むとき、人は誰でも、まずそれを分析的に読むことを強いられる。書かれている言葉を理解し、そこに与えられているそれ以前の哲学の要素を汲み取り、影響の度合いを測り、類似性を抜き出していく。このように抽象的な概念によって哲学者の思想を読み込むことは、いわばその思想の周りを回るようなものだとベルクソンは言う<sup>9)</sup>。しかしその作業は無駄なものではなく、むしろそうした過程を経なければ、その哲学者の思想の全体を理解することはできない。

人間の精神はそういうふうに行っているもので、新しいものを古いものに持って

いくためのあらゆる試みをした上でないと、新しいものを理解する手掛かりを得ない(PM1347)。

だがそうした作業を繰り返していくうちに、全く別の何かが見えてくる、とベルクソンは述べる。それは、「全体がただ一つの点にまとまって」(PM1347)いき、そこに近づいていけるような感じである<sup>(4)</sup>。

我々がその哲学者の思想の周りを回る代わりにその中に身を置こうと努めていくにつれて、その人の学説が姿を変えていくのが分かる(PM1346-1347)。

その先にあるのは、ベルクソンいわくその哲学者が持っていた単純な直観だという。しかしそれは当の哲学者自身でさえ、言葉を尽くして語ろうとして、それでも語りえなかったものである。直観は哲学者の中に何かを表現させようとする力として確かに存在する。だが、それは言葉によって表現しようとした瞬間に逃げ去ってしまうものなのである。そうして、哲学者の書く文章はますます複雑化し、抽象観念に満ち、体系化されていく。しかし「単純な直観、あるいは少なくともそれを翻訳しているイメージ」(PM1348)に遡ってみよう、とベルクソンは提言する。こうしたイメージは「具体的な直観の単純性とそれを翻訳する抽象の複雑さの間」(PM1347)にあるようなものであり、言語よりも直観に近いものなのである<sup>(5)</sup>。

ベルクソンがここで提示している「媒介的イメージ *l'image médiatrice*<sup>(6)</sup>」(PM1355)とは一体どのようなものだろうか。この言葉の手がかりを得るためには『物質と記憶』にまで戻らなくてはならない。ベルクソンは、この書の第七版の序文において次のように述べている。

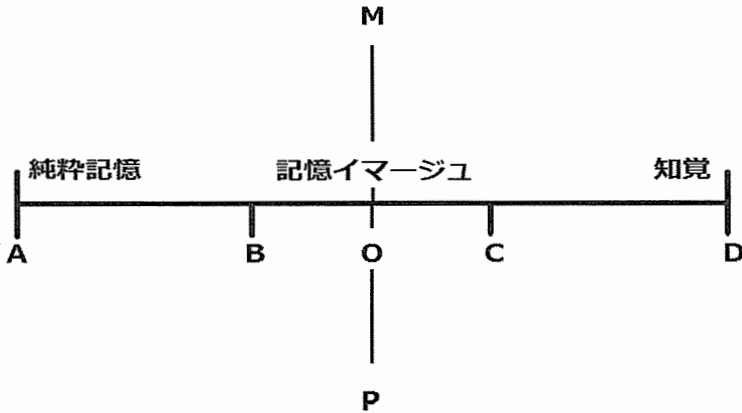
物質とは、我々にとって、「イメージ」の総体なのである。そして、「イメージ」によって、我々は、観念論者が表象と呼ぶものよりまさっているが、实在論者が事物と呼ぶものよりは劣っている存在—「事物」と「表象」の中間にある存在—を理解するのである(MM161)。

物質をイメージと捉える見方は、実は我々の常識的なものの見方である、とベルク

ソンは言う。対象がそれ自体で存在し、同時に我々が見たままの精彩ある姿をしている、それこそがイメージなのである。ここでは、イメージという形で物質と知覚が仲立ちされている。つまり、物質という客体が存在し、それを私という主体が知覚する、という構図ではどこまで行っても二元論を越えることができない。ところが、物質をイメージと捉えることで、それは物質でありながら我々の知覚内容も含んだ両義的な存在として理解されうるのである。

この観点から考えれば、世界はイメージの総体であり、また物質と知覚の間には、全体と切り取られた部分という程度の差異しか存在しなくなる。我々と独立の物質世界も存在しなければ、我々の持つ表象だけで構成される世界も存在しない。

こうしたモデルは、記憶が現実化する際にも適用されることになる。



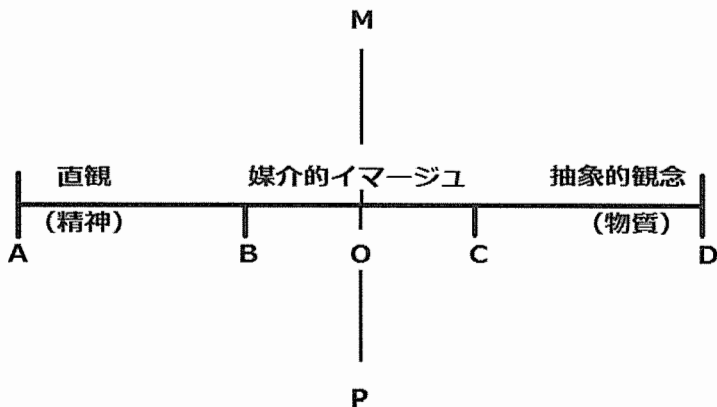
(MM276、論者改)

ベルクソンは、上のような図を提示しながら、記憶が現実化するプロセスを描く。「純粋記憶 le souvenir pur」は「記憶イメージ le souvenir image」を経て「知覚 la perception」へと至る。

我々は三つの項、純粋記憶と記憶イメージと知覚とを区別したが、それらはどれも実際には孤立して生まれるのではない。知覚は決して精神と現前の対象との単なる接触ではなく、それを解釈しながら補う記憶イメージに全く浸されている。記憶イメージは、「純粋記憶」の性質を帯びながらそれを物質化し始めるものであり、知覚の性質を帯びながら具体化しようとするものである(MM276)。

直線 AD に沿う連続運動によって、我々の思考は進んでいくのであり、これらはどこかではっきりと始まったり終わったりするものではない。MP やあるいは B,O,C などの線に沿って区切ることは不可能である。つまり、ベルクソンにとって、記憶とは私の個人的な記憶ではない。それは過去そのものであり、それが記憶イメージにしたがって現実化したものが現在の知覚なのである。現在の知覚に役立つものだけが、純粹記憶の状態から記憶イメージとなって現在のある部分に融合することになる。その時、「過去は純粹記憶の状態を去って」(MM283)イメージとなり、現在の知覚になる。

このようにイメージを定義した上で、『思想と動くもの』と『物質と記憶』の平行関係が強調されなくてはならないだろう。すなわち、ここまでのテキスト読解に関する議論を、次のように図式化することが可能だろう。



このような図式化が無根拠なものではない、という事実は『思想と動くもの』におけるベルクソンの次の言葉からも導くことができる。

抽象的な観念だけに頼ると、我々は物質を手本として精神を表象し、置換、すなわち言葉の厳密な意味にとった隠喩によって、精神を考えたいのである。外見に欺かれないようにしよう。つまり、イメージによる言語の方が意識的に本来の意味でものを言い、抽象的な言語の方が無意識的に隠喩的な意味でものを言う場合もある。我々が精神の世界に立ち入るや否や、例えイメージは暗示する

ことしか求めないとしても、我々に直接的な視覚を与えることができるのに、抽象的な述語は空間的な起源を持ち正しく表現すると称しながら、たいていの場合我々を隠喩のうちにとどめる(PM1285)。

つまり、ある哲学者が持っている単純な直観は、その哲学者自身が持っている持続であり、またその総体である純粹記憶である。しかし、それを抽象観念によって言語化しようとする、持続は言語による分節化を受け入れることができないため、直観は身をひそめてしまう。そこで、その抽象観念を直観の方向に遡らせるために媒介的イマージュが必要となるのである。

ベルクソンは、こうした単純な直観と抽象的な概念を、竜巻とそれが巻き上げる埃に譬える(PM1350)。どのような埃を巻き上げるかは時や場所によって変わったとしても、その竜巻の中心である力は変わらない。直観はいわば竜巻の中心であるところの力である。巻き上げられた埃は哲学者の残した複雑な抽象概念による体系を表している。スピノザが違う時代、違う国に生まれたとしたら、その複雑な抽象概念の様相は全く今とは変わっていただろうが、それでもやはり同じスピノザ哲学であり続けたはずである。「言葉よりも上、文 *la phrase* よりも上にもっと単純な何かがある」(PM1358)とベルクソンは語る。この単純な何かに遡っていくために、媒介的なイマージュが必要となる。それは、その哲学者の思想全体を含んでいるような、近似値的に直観に迫っていける表現である<sup>(7)</sup>。

文章を分析的に読み解き、抽象概念によってこれを理解することは、哲学者の思想を表層的に理解することでしかない。ベルクソンは、言葉による解決を投げ捨てた日に、真の哲学的方法に出会ったと叙述している(PM1330)。我々にはまず、こうした態度が求められなくてはならない。それは、一種の「精神的聴診 *l'auscultation spirituelle*」(PM1408)とでも言うべきものである。分析的に文章を読み解くことは、翻訳の中に、ないに決まっている原文を探すようなものである(PM1406)。肝心なのは、翻訳の要素が原文の部分であるように推理することではなく、原文そのものに可能な限り迫りその生命を深く探ることなのである(PM1408)。

意識や思想、そして持続は言語を介することによって、抽象的な観念という枠に捉われて無味乾燥なものになってしまう。だが、その深奥には、やはりその源泉となっている直観が、持続が内在しているのである。初めは文章を追い、論理構成を分析し、



観念によって理解しなくてはならない。しかし、そこで終わることなく、それらのもとにあったイメージを探っていくことによって、よりその持続に近づくことができるのである。直観そのものは、全く言語化を許さないような、力そのものである。その直観を有している哲学者本人でさえも、それを表現することはできない。だが、媒介的なイメージは言語の形を取りながら、複雑な抽象観念ではなく、単純な具体的観念である。それは他者と共有することができ、かつ直観の方向へ向かっていける、まさしく媒介なのである。

#### 4. 朗読によって自己を対象に同一化していくこと

ところで、ベルクソンは、『創造的進化』において、持続の表現としての詩を高く評価している。

語や行や文を貫いて、単一のインスピレーションが詩の全体を成すものとして流れている(EC714)。

詩は、様々な比喩を用いて、我々に媒介的なイメージを与えてくれる。詩の中に散りばめられている言葉は、日常使う用法や意味を越えて、多くの示唆を含んでいることがある。その意味において、抽象的な観念によって記述された文章よりも直観に近い位置にあると言っても良いだろう。そこで、詩を解釈する場合についても考えてみることにする。

詩人が自作の詩を私に読んで聞かせたとする。彼に対する興味が熟すれば私は彼の思考に分け入り彼の感情に自分をはめ込んで、詩人が語や行の形にばらまいた単一の気分を生きなおすことができる。その時私は詩人の感興に同感し、感興そのものなみの不可分な行為でそれを追いながら連続運動をしている(EC672)。

ここでは詩人が詩を朗読するという行為が挙げられているが、その時ベルクソンは詩人の気持ちと同一化し、詩人の感じていた感情をそのまま自分のものとして連続性を保ちながら感じることができる、と断言している。

さらに『笑い』の中の一節を見ると、これに近いことがより核心を突いた言葉で述べられていることが分かる。

オリジナルな生命で生かされることになる語の韻律的配列によって、彼ら（詩人）は言葉が表現するようには作られていない事物を我々に語り、あるいはむしろ示唆するのである。言葉に翻訳されたくもないあれこれの歓喜や悲哀の元に、彼らはもはや言葉とは全く縁のない者、人によって異なる、その人の意気沮喪や意気軒昂、悔恨や希望、人間にとってもっと内面的なものである生命及びリズムを捉えるだろう(R462)。

ここで注目しておくべきことは、まず先ほどの「興味が熟すれば」という条件を満たすものが、彼らの使う語の韻律的<sup>④</sup>な配列にあることが明らかにされている点であろう。言葉を韻律的に配置することにより、聞いているものはその言葉の裏にある彼らの感情に自分を重ねあわせることができる。

ところで、詩は必ず韻律を伴うが、韻律があるものは必ず詩となるわけではない。一般的に、詩とは韻律とリズムによって形成されるものである。韻律は発音された場合、必ずリズムを持つが、リズムを持つものは必ず韻律となるわけではない。ということは、詩にとって本質的なことは、韻律的配列ではなく、むしろそれがリズムを持つ、ということではないだろうか。このように考えると、リズムは私たちが文章を読解する上で、非常に有用なものであることが分かる。さらに、このリズムによって直観の方向へ遡る、という手法は、詩以外にも使うことができる。ベルクソンが『思想と動くもの』において、朗読の重要性を語っている以下の部分は特筆に値するだろう。

子供がまず作品を改めて創作し、もしくは別の言葉で言うと、ある点まで作家の着想を自分のものとしていなければならない。それには、作家の足跡を一つ一つ踏ませ、作家の身振りや態度や物腰を真似させるほかに道があるだろうか。声を出して正しく読むことはまさにそれにあたる。悟性は後から出てきてそこにニュアンスを付け加える。しかしニュアンスも色彩も、デッサンがなければなんにもならない。本来の意味における知的作用よりも前に、構造及び運動の知覚がある。読んでいく頁には、句読点による区切りとリズムがある。これらのことを適当に

記し、パラグラフの様々な文章および文章の様々な部分の間にある時間的な関係を顧慮し、感情および思考のクレシェンドをさえぎらずにたどって、音楽で最高潮と記される点まで達すること、朗読術はまずこれである。(中略) ついでに言うておくと、今規定したような読書法と、私が哲学者に推奨している直観との間には一種の類比が成り立つ(PM1326-1327)。

文章を声に出して読むことによって、リズムがそこに生まれる。リズムは、その文章に通奏低音のように流れている持続のリズムを表現している。これに自分の持続をあてはめることによって、我々はその文章を記した作者の単一の直観の方向に進んでいくことができるのである。

なぜそのようなことが可能なのだろうか。『精神のエネルギー』所収の「魂と身体」において、この解答が与えられている。

作家の技術は、特に彼が言葉を使っているのを忘れさせるところにあります。彼が求めている調和は、彼の精神の往復運動と彼の言説の往復運動との間にある何らかの対応関係です。この対応関係は極めて完全なものなので、言葉によってもたらされた彼の思考の波動が我々の思考の波動に伝えられ、その時個別的なそれぞれの単語はもはや重要ではなくなるのです。単語を横断して運動する意味と、いかなる媒介もなしに、互いに和音となって直接に振動するように思える、二つの精神以外には、もはや何もありません。したがって、話される言葉のリズムの目的は、思考のリズムの再生に他なりません。そして、思考のリズムとは、思考に伴って、ほとんど意識されない生まれつつある運動のリズムそのものではないでしょうか(ES849-850)。

書かれた文章は抽象観念の複雑さによって体系を成している。それは一見無味乾燥なようであるが、その奥に作者自身の直観が存在することは既に述べたとおりである。思考はイメージを通じて言語化されるが、そこにはある種のリズムが存在している。そのため、言葉のリズムを追うことで、作者の思考のリズムに自分を当てはめることができるのである。書かれている言葉について、その意味の連続ではなく、その発音の配列に注意し、そちらに意識を向けていくことで、作者が持っていた思考のリズム

—その奥には直観が存在する—に我々自身の思考のリズムを重ねあわせていくことが重要なのである。

ドゥルーズは「直観は持続そのものではない、直観はむしろ我々が自分の持続から外へ出て、我々の上下にある他の持続の存在を直接的に確認し、認識するために持続を用いる運動である<sup>9)</sup>」と言う。違う言葉で言えば、我々は自分自身の持続をものさしとして、他の事物—それは他者の意識の持続であったり、あるいは動物のような生命一般、そして外的な事物の時間的側面であったりするのだが—における持続的なものを認識するのである。ベルクソンもまた、次のように述べている。

直観は、世界という大きな書物の中から自分が選んだ頁の中に、構想の動きとリズムを発見し、同感によってそこにはまり込みながら創造的進化を体験し直そうと欲するだろう(PM1327)。

これらのことから、文章を朗読する、という方法も媒介的イメージを求めていく方法と同様に有効であることが分かるだろう。

## 5. まとめ

ここまで、ベルクソンの言語観を確認したのちに、そのネガティブな側面を乗り越えるための方策をベルクソンに沿いながら考えてきた。一つは、書き表された文章を媒介的イメージによって読み解くことで、その内奥にある作者自身の直観に迫るという方法。これらの関係は、記憶がイメージによって知覚へと現実化するモデルと並列に、直観が媒介的イメージによって抽象観念へと空間化する、という形で捉えることができる。そこで我々が作者自身の直観へと遡ろうと思うならば、媒介的イメージを通じて逆の方向へ進んでいけばよいのである。

そしてもう一つの方法は、詩を聴く場合に象徴されるように、話される言葉のリズムに自分自身の持続を当てはめることである。もし書かれた言葉に対しこの方法を適用しようとするならば、それを朗読することで可能となる。言葉のリズムの奥には、思考のリズムがある。ここでも、リズムという定数項を介して、思考—イメージ—言葉という一連の流れが存在する。

澤瀉は、ベルクソンの直観は四つの型に分けられるという。それは、第一に、自身の精神の直観、第二に他の精神の直観、第三に生命全体、すなわち意識一般の直観、そして第四に外的対象の魂を捉える直観である<sup>(10)</sup>。この四つの型は、四つのレベルと言い換えることもできるだろう。文章を読み解くというのは、直観の第四の型にあたるものである。そのように考えた場合、この外的対象としての文章の奥にある持続を探っていく、という行為は自分自身の精神の持続を意識するよりも遥かに困難かもしれない。だが、それは明確に述べられている普遍的な方法であり、誰もに開かれている可能性なのである。

以上のことから、我々が文章を読み解くときには、分析的に表層を追っていくだけではその作者の伝えたかった本質に迫ることは不可能であり、そうした作業は準備段階として必要であるにせよ、あくまで直観の方向へと向かっていく努力が求められていると言えるだろう。

## 注

ベルクソンの著作は基本的に略号で表し、頁数は *œuvres*, Presses Universitaires de France, 1970 からのものとする。

著作の略号は以下の通り。

*Essai Sur Les Données Immédiates*=DI

*Matière et Mémoire*=MM

*L'Energie Spirituelle*=ES

*La Pensee et Le Mouvant*=PM

*L'Évolution Créatrice*=EC

*Le Rire*=R

(1)ベルクソンが使う「観念」、という言葉には注意が必要であろう。観念は、自然な状態で、いわば「空間の固定観念 *l'obsession de l'espace* から解放されて」(DI89)捉えられれば、具体的な観念と表現される、感情のような持続となる。しかし、もしこのような具体的な観念を分解し諸要素によって再構成した場合、それは空間的な表象を含んだ抽象観念ということになる(PM1285)。ここで使われている「観念」という言葉は前者の意味に近いが、続く文章で明示されているように、我々の思考は多くの場合

空間的な表象を含んでいるので、完全に自然な状態でそれを把握するのは困難である。

(2)ここでいう因襲的な自我、とは、外的な自我、とほぼ同じ意味である。つまり、社会生活を送る上で我々がとる、表層的な意識形態のことである。

(3)ベルクソンは『思想と動くもの』でこれまでの哲学を、持続を見逃してきたものとして批判する。それは言語に従っていたからである。そのような哲学は、Lindsayに言わせれば、世界を作られたものとして、個体を既に存在する要素の寄せ集めとして、時間の経過を写真のスナップショットの連続として見るようなものである。Cf. A.D.Lindsay, *The Philosophy of Bergson*, J.M.Dent Sons, 1911, p.223.

(4)ここでベルクソンは、「そこに到達することは断念しなければならないとしても」(PM1347)と語っている。また、『ベルクソンとの対話』においても、このことを回想し、直観そのものに遡ろうとしたのではなく、知的近似値 *l'approximation intellectuelle* に止まることを言おうとした、と語っている。しかし、やはり重要なのはこの「直観に近づくために従うべき方向」なのである。Cf. Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959, p.198.

(5)Jankélévitch はベルクソンのこうした態度を次のように表現する。「ベルクソンは蒸留によって、持続という濃縮されたアルコールを入手しようとした。そのためには生を混濁させている言葉の上の形式的な論議や文法上のカテゴリーを除き去らなくてはならない。ベルクソン哲学は直接与件の探求なのである」。ここでもベルクソンが向かうべき方向性が明示されている。Cf. Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, P.243.

(6)ここは一般的に「媒介的イメージ」と訳されることが多いが(河野与一訳岩波文庫、坂田徳男他訳中公クラシックスなど)、本論では『物質と記憶』との関連性を踏まえてイマージュと訳すことにする。

(7)例えばスピノザであれば、「我々の精神が完全に真理と認識するための作用と神が真理を生み出すための操作との間に存する一致の意識」(PM174)であり、バークリであれば「物質は人間と神との間に置かれた透明な薄膜」(PM183)あるいは、「物質は神が我々に話す言語である」(PM184)という表現となる。

(8)韻律とは音の長さの規則のことである。例えば日本では五七五の俳句が有名。

(9)Gilles Deleuze, *Le Bergsonisme*, PUF, 1968, p.24.

(10)澤瀉久敬、『アンリ・ベルクソン』、中公文庫、1987、p.147.